

## 2021年5月30日 説教「天からの生けるパン」

ヨハネの福音書6章41~51節

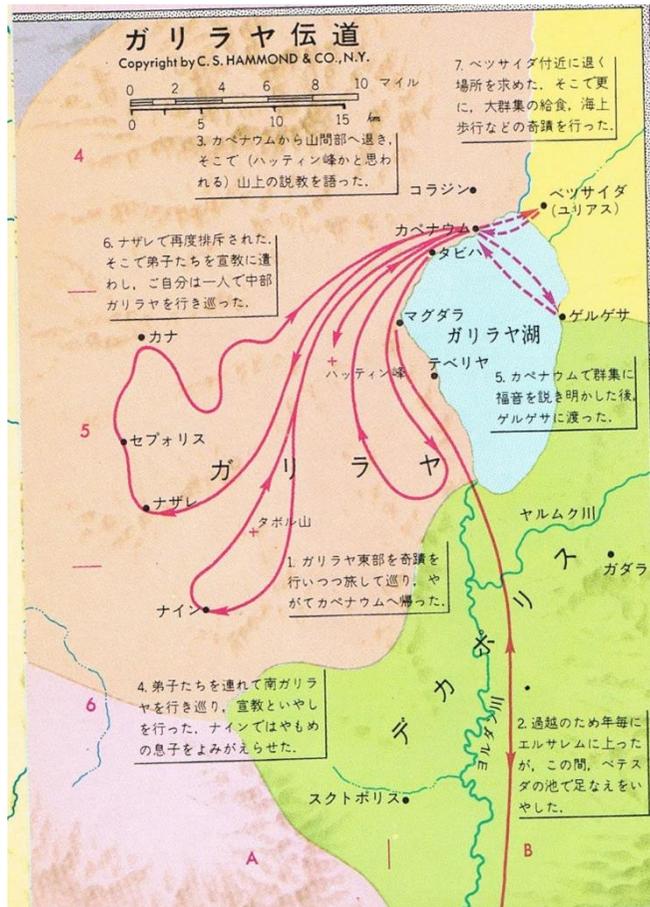
先週はペンテコステ（聖霊降臨日）で、使徒の働き2章から洗礼の出来事を学びましたが、今朝はヨハネの福音書から学びます。

### 1. 人々のつぶやき (41~44節)

- ①天から下ってきたパン (41)「ユダヤ人たちは、イエスが『わたしは天から下ってきたパンである』と言われたので、イエスについてつぶやいた。」イエスは「わたしがいのちのパンです」(35)と言われました。また、その直前に荒野のマナになぞらえながら、「わたしの父は、あなたがたに天からのまことのパンをお与えになります」(32)とされています。イエス・キリストはご自分が永遠の命の源であると述べられたのです。それについて、ユダヤ人たちは、つぶやきはじめました。
- ②ヨセフの子 (42)「彼らは言った。『あれはヨセフの子で、われわれはその父も母も知っている。そのイエスではないか。どうしていま彼は、『わたしは天から下って来た』というのか。』五千人の給食がなされたのはガリラヤ湖の北東部ベツサイダと思われます。そして、イエスがユダヤ人たちと話されたのは北西部のカペナウムです。そして、イエスが育ったのは、ガリラヤ湖から25キロほど西にあるナザレでした。ユダヤ人の中には、イエスの家族について知っている者たちもいました。「あいつはヨセフの子じゃないか。あいつの両親については、良く知っているのに、どうして「わたしは天から下って来た」というような荒唐無稽のことをいうのかというわけです。「預言者は郷里では歓迎されません」(ルカ4:24)と主は言われましたが、ユダヤ人たちはイエスのご本質を見ることができなかつたのです。
- ③主の引き寄せで (43~44)「イエスは彼らに答えて言われた。『互いにつぶやくのはやめなさい。わたしを遣わした父が引き寄せられないかぎり、だれもわたしのところに来ることはできません。わたしは終わりの日にその人をよみがえらせます。』」イエスが「互いにつぶやくのはやめなさい」と言われたのは、人間のつぶやきが的外れであるからです。しかし、主の引き寄せがある時に、人は素直に主イエスに心を向けるようになるのです。そして、その人には永遠の命（ゾーウェー）が与えられ、終わりの日には、よみえがることになるのです。

### 2. いのちを得る者 (45~47節)

- ①父から学ぶ (45)「預言者の書に、『そして、彼らはみな神によって教えられる』と書かれています。父から聞いて学んだ者はみな、わたしのところに来ます。』」預言書であるイザヤ書54:13には「あなたの子どもたちはみな、主の教えを受け、あなたの子どもたちには、豊かな平安がある」とあります。主の教えを自らのものとして受け入れていった人は、主なる神様に魂が向けられていくのです。そして、そ



の結果には平安があるのです。

②**神から出た者が (46)「だれも父を見た者はありません。ただ神から出た者、すなわち、この者だけが、父を見たのです。」**ヨハネはすでに1章18節において、「いまだかつて神を見た者いない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説きあかされたのでさる。」と記しています。イエス・キリストはご自身が神であり、父なる神を見たと言明されています。キリストが父を見るというのは、視覚的なことよりも、知ることを示しています。キリストは父なる神を全面的に知っておられるのです。

③**永遠の命を (47)「まことに、まことに、あなたがたに告げます。信じる者は永遠のいのちを持ちます。」**アーメン、アーメン、レゴー、ヒュミン。まことに、まことに、あなたがたに告げます。「信じる者は永遠のいのちを持ちます」。すなわち、神ご自身であるイエス・キリストを信じる者は永遠のいのち(ゾーウェー、アイオーニオ)をいただくのです。キリストは、信じるなら救われますと説かれました。

### 3. いのちのパンであるキリスト (48~51 節)

①**いのちのパン (48~49)「わたしはいのちのパンです。あなたがたの父祖たちは荒野でマナを食べたが、死にました。」**そして、35節の御言葉が再度伝えられます。「わたしはいのちのパンです」。そして、そのことを明らかにするために、例が出されます。それは、出エジプトの時代、荒野におかれたイスラエルの民に、神からマナというマシュマロのような食べ物(マナ)が備えられました。マナは荒野において生きる民にとっては天からの恵みでした。しかし、今ここでイエス・キリストは「いのちのパン」というのは、出エジプトの時代のマナとは異なるものだと言われるのです。なぜなら、マナを食べて生かされた人々は、やがて死にました。ここでは、肉体の命ではない、「いのち」のパンについて伝えられているのです。

②**死ぬことがない (50)「しかし、これは天から下って来たパンで、それを食べると死ぬことがないのです。」**その「いのちのパン」は、「天から下ってきたパンだ」と言います。天から下ってきたという面では、マナと同じなのですが、このパンは食べると死ぬことがないというのです。ですから、マナのように肉体の口からいただくものではなく、さうです。しかし、ここではあえて食べるという表現が使われているのはどういうことでしょうか。それは、魂の口から食することがイメージされているのです。天から下り、魂の口で食べるパンをいただく者は死ぬことがないということです。死ぬことがないというのも、信じる者たちには新しい命が与えられるからです。

③**生けるパンを食べる (51)「わたしは、天から下ってきた生けるパンです。だれでもこのパンを食べるなら、永遠に生きています。またわたしが与えようとするパンは、世のいのちのための、わたしの肉です。」**

キリストは改めて言われます。「わたしは、天から下ってきた生けるパンです」。そうです、天から下ってくる生けるパンとはキリストご自身なのです。このパンを食べるなら永遠に生きてと言われます。この方に、私たちのキリストを信じ、この方に委ねて歩いていく時にそれが実現するのです。キリストが与えてくださるパンとは、世の人々が救われるためなのです。そして、キリストが地上の肉体をもって生きてくださったことによって実現したのです。

《結論》 5月16日から、ヨハネの福音書の中で、イエス・キリストが「わたしは

~である」(エゴー・エイミ)と言われた箇所から学んでいます。今朝は前回

続き「わたしはいのちのパンです」という主の言葉からの学びです。

35節に続いて、43節において「わたしはいのちのパンです」と言われています。35節には「わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は、決して渇くことがない」と続けました。43節においては、出エジプト時代の荒野におけるマナと比較されて、いのちのパンというのは「天から下って来たパン」であり、それを食べると死なないと語られました。さらには、このパンを食べるなら永遠に生きてと言われました。これは既に説明したように、肉体の命は死を迎えても、キリストを信ずることによって与えられる、いのち(ゾーウェー)は死ぬことがないということです。

ここで、さらに深めておきたいことは、キリストが「いのちのパン」と言われたことです。「いのちのパン」を食するなら、生きるということです。「いのちのパン」であるキリストを食するというのはどういうことなのでしょう。

このことについて、使徒パウロがヒントを与えてくれています。

「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が肉にあって生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。」(ガラテヤ人への手紙2章20節)

パウロは「もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。」と告白しました。ここに、キリストが提供して下さる「いのちのパン」をいただくことと重なってきます。パウロはキリストに徹底して生きる道を示していると言って良いでしょう。

私たちのなぜ悩むのでしょうか。なぜ心苦しむのでしょうか。それは「私」が強いからではないのでしょうか。「私」というのは、生来の性質、罪に支配された存在、と言い換えられます。「私」が勝っていると、自分の欲が中心ですから、満たされずに悩みます。また、事が願望通りになっていなければ、「私」は苦しみ罪を加え、悩みが増すのです。変わらない現実にかかえるのです。

私たちは求めるように教えられています。しかし、「私」が支配者になってはならないのです。与えてくださるのは主なる神です。自分の思う通りにするために、主を利用する事は、肉の道、苦しみの道につながります。

キリストが自分のうちに生きて働いていただくために、主にまかせましょう。主に委ねましょう。そして、十字架と復活のキリストとを、ことあるごとに覚えつつ、祈り、賛美し、御言葉に親しんで歩んでいきましょう。そして、そのようにして歩いていくことが、キリストの生けるパンを食べていく道なのです。